国語科学習指導案

日　　時　　１０月１８日（火）５校時
展開学級　　１年Ｆ組
展開場所　　体育館
授 業 者　　菰田　敏史

１　単元名

古典との出会い　蓬莱の玉の枝―「竹取物語」から

２　単元について

（１）単元について

本単元は、生徒たちにとって本格的な古典との出会いとなる単元である。ここで学習する「竹取物語」は、「かぐや姫」の物語として絵本などを通して広く知られている作品であり、その構成や展開は明快で分かりやすく、古典の導入教材としてふさわしいものと考える。幼い頃より親しんできた物語が、紫式部により「物語の出で来はじめの祖」と称され、現存する最古の物語として千年以上もの間、読み継がれていることは、興味深いものであるだろう。

古典の入門期において古典への興味・関心を持たせることは、その後の古典指導に大きな影響をもたらすと考える。新学習指導要領では、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕が新設され、我が国の言語文化を享受し継承・発展させるため、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する指導を重視している。

そこで、本格的な古典との出会いとなる本単元を展開するにあたり、古典への興味・関心を高めることを第一に考えた。昔話と古典の現代語訳の読み比べを行うことで意欲を喚起し、言葉にこだわった音読・暗唱を行い、内容をとらえることで分かる喜びを味わわせたい。そして、５人の貴公子の求婚の話を通して、古人のものの見方や考え方に触れ、古人を身近に感じさせることで興味・関心を高めていきたい。

（２）授業の構想

古典を学習する際にまず音読、そして暗唱へとつなげていく学習を通して親しむことも重要だが、いきなり原典を読むのではなく、現代語訳を読んで、「実は古典は現代にも生きている」ということに気づいたとき、古典への抵抗感が少しは和らぎ、親しみを持つことができるのではないかと考えた。そこで、本単元の導入では、昔話と古典を読み比べるという活動を行う。朝読書の時間を利用して、図書館指導員による昔話の読み聞かせを行い、授業でそれらの古典の現代語訳を読ませ、内容の違いを指摘させる。現在伝わっている昔話は、古典が姿を変えながら現代にも生きている。生徒はこの活動を通して、様々な違いを発見することにより喜びや驚きを感じることであろう。そして最終的には「他の作品はどうだろう」「他の作品を読んでみよう」という意欲の喚起につなげたい。

そして、その思いを古文の音読につなげることにより、特有のリズムを体感させたい。生徒たちのほとんどは古文を初めて読むことになるが、歴史的仮名遣いや古語と現代語の意味の異同、

助詞の省略などに気づいたり、疑問をもったりするであろう。本時では言葉に関する気づきや疑問を五つに分類（①現代語と似ているが意味が違う言葉、②現代語にない言葉、③現代ではあまり使われない言葉、④古文独特の言い方、⑤助詞の省略）し、ひとつひとつの言葉にこだわりながら音読するという活動を行う。ただ音読するだけではなく、古文の言葉と現代語の違いを理解したうえで、言葉にこだわりながら音読できるようになることで「できた・分かった」という自信につながるのではないかと考える。

また、暗唱によってリズムを味わわせるだけでなく、古人のものの見方や考え方にも触れさせたい。美しいものや不老不死への憧れ、人間の欲望など、古人と現代人との共通点や相違点を発見させることで、古人を身近に感じさせるとともに、生徒自身の考え方が広がると思い、本単元を設定した。

（３）つけたい力

今まで「古典は嫌い、苦手」という言葉を何度も聞いてきた。その理由を尋ねると「難しいから」や「分からないから」と言う答えが返ってきた。古典を難しく感じさせる、分からなくさせる大きな原因は、言葉の意味が分からないことだと考える。今までの指導は、教師の範読に続いて生徒に音読させることで古典特有のリズムを味わわせようとするものだった。そのため、生徒に言葉について考える機会を十分に与えていなかったように思う。しかし、古典特有のリズムだけでなく、言葉の切れ目やひとつひとつの言葉そのものを意識させることで、現代語訳をイメージすることができ、苦手意識や抵抗感が少しは軽減するのではないかと考えた。そこで、本時は言葉を意識して音読する力をつけていきたい。

（４）本校の研究主題との関わりについて

本校は「望ましい自己表現ができる生徒の育成」を研究主題としている。国語科では「望ましい自己表現」を「伝え合う力」ととらえ、伝え合う力を言語能力とするために、言語活動をふまえた学習指導を展開することを目指し、「伝え合う力を高めるための指導の工夫～言語活動をふまえた学習指導の工夫を通して～」を研究主題として設定した。本単元では、ペアやグループによる活動を入れて、自分の意見や考えを表現する場や、自己表現をより豊かなものにするために、言葉について考える場を設定したい。

３　単元の目標

・音読や意見交流を通して、古典に親しもうとする。【関心・意欲・態度】
・古文の仮名遣い・言葉を理解して内容が分かるように音読する。【読むこと（ア）】
・場面の展開や登場人物に注意して内容を理解する。【読むこと（ウ）】
・五人の貴公子の話から古人のものの見方や考え方に触れ、自分の考え方を広げる。【読むこと（オ）】
・文語のきまりを知り、古文特有のリズムを味わいながら音読する。【伝統ア（ア）】
・古典には様々な種類の作品があることを知る。【伝統ア（イ）】

4　評価規準

評価の観点	評価規準
国語への 関心・意欲・態度	・進んで作品を読み、分かったことや気付いたこと、疑問をまとめようとする。 ・話し合い活動に積極的に参加しようとする。 ・古文特有のリズムを味わいながら音読しようとする。
読むこと	・場面の展開や登場人物の言動に注意して、内容をとらえることができる。 ・古人のものの見方や考え方に触れ、自分の考え方を広げることができる。
伝統的な言語文化と 国語の特質に関する事項	・歴史的仮名遣いを理解し、古文特有の読み方を理解しながら音読することができる。 ・様々な作品に触れ、いろいろな作品があることを理解することができる。

5　指導計画

次	時数	学習活動
1	1	・昔話と古典の現代語訳を登場人物や話の展開を中心に読み比べる。 ①昔話は朝読書の時間に図書館指導員の先生に読み聞かせをしてもらう。 ②古典の現代語訳を読み、昔話と違うところをおさえる。 ・読み比べたことを班で話し合い、発表する。 ①おさえた違いを班内で出し合いまとめる。 ②班で出たことを発表する。その際、他の班の発表を聞き、他の作品の違いについても知る。
2	2	・「竹取物語」の冒頭部分を音読する。 ①ノートに視写したものを見ながら教師の範読を聞く。 ②範読を聞いて気付いたことや疑問をあげる。 ③現代仮名遣いと歴史的仮名遣いの違いを理解する。
	3（本時）	・前時であげた気付きや疑問を分類し、古文の言葉と現代語の違いを理解する。 ①あらかじめ教師が五つに分類し、生徒はどの言葉がどの分類に入るのかを考える。 ・「竹取物語」の冒頭部分を、言葉を意識し、意味が分かるように音読する。 ①どのように読めば意味が分かるかを考える。 ②考えたことをもとに音読の練習をする。 ③音読の発表をする。
	4	・「竹取物語」の『蓬莱の玉の枝』の部分、『富士山のいわれ』の部分を、言葉を意識し、意味が分かるように音読する。

		①どのように読めば意味が分かるかを考える。 ②考えたことをもとに音読の練習をする。 ③音読の発表をする。
3	5	・５人の貴公子の求婚に対する課題とその結果について知り、古人のものの見方や考え方に触れる。 ①便覧と現代語訳を読む。 ②それぞれの貴公子について、かぐや姫からのお題、とった行動、結果についてまとめ、全員で確認する。 ・古人と現代人の共通点や相違点を考える。

6　本時の指導

（1）本時の目標

・ひとつひとつの言葉を意識して音読しようとする。【関心・意欲・態度】

・仮名遣いや言葉を理解して音読する。【読むこと（ア）】

・文語のきまりを知り、古文特有のリズムを味わいながら音読する。【伝統ア（ア）】

（2）本時の展開

時配	学習活動	指導内容と留意点	評価
導入 （7分）	・竹取物語の冒頭部分をどうしたら読めるようになるかを考える。 ・歴史的仮名遣いの復習をする。 ・ペアで音読し合う。	・ノート（原文を視写したもの）を開かせ、何が分かれば読めるのかを考えさせ、発言させる。 ・パターンを全員で確認したあと、冒頭部分の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改めさせ、発表させる。 ・聞いている生徒は、歴史的仮名遣いが正しく現代仮名遣いに改められているかをチェックし、指摘するようにさせる。 ・全員終わったら、感想を聞く。	
	竹取物語の冒頭部分を音読しよう。 ・今日の学習課題を知る。 ・竹取物語の冒頭部分の現代語訳を聞く。 ・どの言葉がどの分類に入るのかを考える。	・ただ音読するだけでなく、言葉を意識して音読していくことを伝える。	

展開 （４０分）	①まじる→分け入る あやし→不思議に思って うつくし→かわいらしい ゐる→座っている ②いと→まことに ③翁、よろづ ④今は昔、けり（る）、たりなむ ⑤「が」の省略（５カ所）	・生徒から出た気付きや疑問を次の五つに分類した。竹取物語の冒頭部分から該当する言葉を探させる。その際、ひとつひとつ全員で確認しながら進めていく。 ①現代語と似ているが意味が違う言葉、②現代語にない言葉、③現代ではあまり使われない言葉、④古文独特の言い方、⑤古文では省略されている言葉 ・①②に関しては、原文と現代語訳から言葉を見つけさせ、チェックさせる。 ④に関しては、係り結び（強調）について触れ、⑤に関しては「が」が入ることにより、切れ目が生じることを説明し、それが音読に生かされるようにする。	・言葉について考えようとしているか。【関】
	・どのようにすれば分かりやすい音読になるのかを考える。	・特に言葉の切れ目や強調するところを考えさせる。	・考えたものを音読に生かそうとしているか。【関】
	・班で音読の練習をする。聞いている生徒はアドバイスする。	・机間指導をし、適宜アドバイスする。	・考えたものを音読に生かしているか。【読】
まとめ （３分）	・「竹取物語」の冒頭部分を全員で音読する。 ・次時の予告を聞く。	・次時の予告をする。	

（３）本時の評価

・言葉の意味を考え、それを音読に生かそうとする。【関心・意欲・態度】

・それぞれの言葉にこだわり音読している。【読むこと（ア）】

・歴史的仮名遣いや言葉の切れ目に注意して音読している。【伝統ア（ア）】